

レジデンス・イン・森下スタジオ ヴィジティング・フェロー
ズヴォニミール・ドブロヴィッチ パブリック・トーク

2013年11月28日(木) 15:00-16:30

スピーカー ズヴォニミール・ドブロヴィッチ

【はじめに】

本日はお集まりいただきありがとうございます。私は今、クロアチアで2つのフェスティバルとニューヨークのフェスティバルのアーティストック・ディレクターをしています。本日は、バルカン半島の状況や舞台芸術シーンについてお話ししたいと思います。

私は東欧で活動していますが、舞台芸術の世界で仕事をするのはとても興味深いことだと思っています。というのも、この地域では非常に多くの変化が起きており、社会が新しく変わろうとするときに、芸術は社会や政治の情勢に対し新しい視点を与えてくれるからです。旧ユーゴスラビアでは歴史的に劇場は重要な場です。検閲から逃れられる場であり、様々な考え方を共有する場であるからです。

旧ユーゴスラビアは、ヨーロッパ全体で見ると東と西の中心に位置し、東と西のアートが出会う場所でした。第二次世界大戦後、アヴィニオンやヴェネツィアのアートフェスティバルがそうであったように、ドゥブロヴニクや他の地域で復興のためにフェスティバルが開催されました。そのため、国民全体がアート活動に造詣が深く、いろいろな情報がリアルタイムで入ってくる場所でした。しかし、ユーゴスラビアという国の解体により、旧ユーゴスラビアから独立した国々はその東と西の中心という立場を失い、他の国や地域から軽視され、今は、新しい現実の中で新しい立場を確立しようとする過渡期にあると思います。

「中心」と「周辺」ということが議論の対象になることが多いのですが、それらが何を意味し、権力とは何であるのかなどの問題もあります。コンセプチュアル・アートを始め様々な芸術活動がありますが、いずれにしてもそれらの問題が障害となっています。また、国家体制が変わり、東と西の中心という立場を失いましたが、バルカン半島での権力の中心とその周辺地域での経済問題に直面しています。これは芸術シーンにも影響を与えていて、バルカン半島全体で芸術に投資するお金がなく、海外のシーンにアーティストを送り出すことが困難な状況となっています。

また、旧ユーゴスラビアの体制から芸術を支える仕組みが引き継がれていますが、その仕組みを維持することは経済的に非常に難しく、政府は文化機関だけを維持したいと考えています。しかし、それらの文化機関は組織が大きく、多くの職員も雇用しているため、組織の運営だけにしか資金を工面することができず、事業やプログラムを推進する予算がない状況です。そして、多くの芸術団体やインディペンデントで活動するアーティストは、その仕組みの中では活動することができなくなりました。一方で、ヨーロッパでの国際プロジェクトや助成金は、かつてのように特定のフェスティバルだけを対象にするのではなく、非常にオープンとなってきています。私がアート活動を始

めた頃は、国が支援する文化機関の活動は進展がなく、多くの創造的な活動はそれらの組織の外で行われていました。そして、それらの創造的な活動には支援がありませんでした。当時の作品は非常に政治的なものや抗議を意図する直接的な表現もあり、とても注意を引く作品が多かったと思います。ここまでがバルカン半島の状況の説明で、これから私が運営しているフェスティバルについて具体的な話をします。

【「Queer Zagreb」と「Perforations Festival」について】

最初に手がけたのは、2003年の「Queer Zagreb」ですが、それを始める前は別のフェスティバルで働いていました。そのフェスティバルでは様々なボディ・アーティストがパフォーマンスをし、ジェンダーや肉体的なものをテーマとしていたのですが、当時のクロアチアでそれらのパフォーマンスを観たことがとても重要な出来事でした。というのも、90年代以降のクロアチアは、政治的にも宗教的にも単一的な考え方や物の見方が広がり、国家主義が台頭していたからです。国自体が混乱している時期でもあったので、批評的、批判的な考えが追いやられ、国家主義を規範とし、それに反するものは悪いものだと考えられる時代でした。そのため、私にとってアートは、単一的な考え方や物の見方を変えるものでした。そのようにアートは十分に活用されていないのではないかと感じることもあります。一方でアートは純粋にアートとしての存在もあると思いますので、アートは政治的に利用され目標を達成するための手段ではないと考えています。

クロアチアの様々な社会の規範を壊していくために、「Queer Zagreb」ではそれらの規範に準じないものについて議論する場をつくりました。「Queer」はヨーロッパの学術的な文脈ではジェンダーや LGBT (L=レズビアン、G=ゲイ、B=バイセクシュアル、T=トランスジェンダー) を意味しますが、そのようなアイデンティティをベースにすると芸術的には面白くないと感じたので、Queer を「規範に準じない全てのもの」と捉えています。そして、まず始めにシングルマザーを Queer の 1 人であるというアイデアを紹介しました。シングルマザーは家父長的な制度において、一番影響を受けやすい、弱い存在だからです。そして、このアイデアからいろいろな活動が始まり、規範とは別の視点にあるものを開拓していきました。例えば、赤ちゃんが生まれた時に、女の子だから、男の子だからという考えに縛られて子どもを育てることは、ある意味で暴力や虐待なのではないかというアイデアを紹介したことです。極端な考えかもしれませんが、これらが社会の規範について考える様々な議論の起点となりました。「Queer Zagreb」に参加した、世界的に活動しているジェローム・ベル、ライムント・ホーゲなどはメインストリームで作品が紹介されていますが、一般的に Queer とは思われていないものを Queer の枠組みで紹介したことが面白い点だったと思います。今では Queer フェスティバルはファッショナブルでポピュラーなものになっていますが、ニューヨークで同様のフェスティバルを手がけたときに意外な経験をしました。ニューヨークはアイデンティティという考え方に捉われていて、コンテンツだけでなく表現形式までも分類することを重要とし、ダンスなのか、パフォーマンスなのか、また、ビジュアルアートなのかというように分類する考えが根強く、とても時代遅れだと感じました。

Queer やアイデンティティについて基本的な理解をすることが重要で、アイデンティティには、垂

直的なものと水平的なものとの違いがあると思います。アンドリュー・ソロモンの「Far from the Tree」という本が参考になったのですが、その本ではどのようにアイデンティティが形成されるのかを紹介しています。そして、作者は社会の中のグループがアイデンティティの形成に影響を与えていると主張しています。例えば同性愛者は水平的にアイデンティティを形成し、同性愛者の仲間のグループから影響を受けます。通常、アイデンティティの形成には親が子に影響を与えるものですが、同性愛者の家族から子どもが生まれることはないの、親と子の間に同性愛者のアイデンティティを結びつけるものはありません。一方、生まれつきで聴覚に障がいのある人はその親が聴覚に障がいがある場合と、障がいがない場合があります。つまり、親と子の縦の関係の中でアイデンティティを形成する場合と、周りの聴覚障がい者との横の関係でアイデンティティを形成する場合があるということです。現代は科学が発達しているので、手術で耳が聞こえるようになる場合もありますが、親が聴覚障がい者の場合、その子どもに手術を受けさせたいとは考えず、聴覚障がい者が一つの文化と考えているという興味深い事例もありました。また、ブラジルの著名な演出家で、ブラジルの演劇を国際的なものにしたゼ・セウソは、ブラジル人がアイデンティティを獲得した最初の行動は 500 年以上前にさかのぼり、原住民がポルトガルから来た司教を殺害し、その肉を食べたことだと言っており、これは美しい言葉だと思っています。

もう 1 つの私のフェスティバル「Perforations Festival」について紹介したいと思います。このフェスティバルはバルカン半島全体に視野を向け、先ほどお話した、国からの支援のないインディペンデントなシーンで活動するアーティストをサポートするために立ち上げました。毎年、20-25 の共同製作作品やコミッションワークを紹介しています。

最初にスライドをお見せします。「Queer Zagreb」を始めたとき、教会が抗議のデモを起こしました。2 年目には私の方から教会に働きかけ、その抗議デモ自体をフェスティバルのオープニングプログラムの一つとして取り込み、カタログにもその抗議デモを 1 つのパフォーマンスとして紹介しました。それ以降、抗議デモはなくなりました。次はクロアチアの重要なパフォーマンス・アーティストのトム・ゴットの作品で、これは 40 年前のものですが、このパフォーマンスの後に彼は逮捕されたので、みんながよく覚えています。これは 3 年前のものですが、一番左にいるのがトム・ゴットで、この 3 人はタブーを破る活動や、パブリックとプライベートの境界をなくす活動をしています。これはマケドニアのアーティストで、マリナ・アブラモヴィッチが MoMA で発表した『Nude with Skelton』を再構築するという作品です。これはもう 1 人のマケドニアのアーティストで、マケドニアの国旗にある太陽を象徴的にした作品です。太陽の光を反射する巨大なバルーンで、晴れた日には太陽からの光を反射してバルーン自体を直視することができないので、2 つの太陽が浮かんでいるように見えます。マケドニアはヨーロッパで一番難しい政治情勢にある国で、その周りをギリシャ、ブルガリア、アルバニアなどが取り囲み、マケドニアの一部を国土にしようとする動きがあります。一方で、マケドニアは国としてポスト・モダニズムを歩んでいると思います。今、彼らが取り組んでいることは過去の出来事を再構築することで、二千年前や三千年前の時代のように国を再建しようとしています。例えば、マケドニア様式の柱がある国会議事堂を建てたり、考古学博物館から古代の彫像を持ち出し、首都に移設するなど、一見、普通では考えられないことにも思えるのですが、国のアイデンティ

ティを再構築しているように思います。皆さんも機会があればマケドニアに行ってください。パリやロンドンより面白いことが起こっていると思います。

これはクロアチアのアーティストで、いろいろな機械を使って大きな音を立てながらパフォーマンスをしている人です。パソコンが並んでいますが、面白い仕組みになっていて、パソコンが下水道の蓋のイメージになっています。蓋の開け閉めで下水道が連想されるような作品です。

これはクロアチアで今一番面白い振付家で、観客を室内に入れた後、ドアをすべて糸で閉鎖してしまうパフォーマンスを行っています。外に出るためには、観客はその糸のドアを自分たちで壊さなければいけません。完成した作品を見るのが一般的ですが、彼女の作品では創作のプロセスを観客と共有します。糸を紡ぎながら閉じていくような状況は美しく、それを見ることも観客にとって興味深いものだと思います。彼女はドアを閉じて出て行ってしまふので、観客は室内に取り残されて戸惑うのですが、10分ぐらい経つとその糸のドアを破って出て行きます。最初に出ていく人は喫煙者が多いのですが、日本では20分ぐらいかかるかもしれませんね。これはスロベニアの著名なアーティストで、短いパフォーマンスを繰り返す作品です。最初は両手両足が自由な状態でパフォーマンスを始め、次に片足を縛りパフォーマンスをし、その次には別の足や片腕を縛ってパフォーマンスをしています。

次は3ヶ月前に亡くなってしまったクロアチアのアーティスト、私も大好きなアーティストの一人でした。多くのインスピレーションを与えてくれ、フェスティバルで15作品ぐらい紹介しました。このアーティストは食べ物のインスタレーションをつくるのですが、非常に政治的な作品で、クロアチアとどこかの国との二国間の関係をテーマにしています。その関係性を見方に驚きを感じることも多いのですが、この作品ではクロアチアと米国の関係を表しています。アルファベットでCroatishと表記される作品なのですが、tishはクロアチア語でテーブルという意味もあるので、クロアチアとテーブルをかけた作品にもなっています。他にもフランスなどいろいろな国との関係を表す作品を作っています。この作品はザグレブの現代美術館で展示され、展示された作品を全部食べることもできます。美術館が作品を気に入って3-4日間、捨てずに展示をしていたのですが、食べ物が腐って異臭が充満してしまったそうです。腐ったことも付加価値的な意味を持ったと言えます。これはフランスとの関係の作品で、ケーキなのですが、お墓をイメージしていて、生きたミミズとともに展示されました。そのお墓の中には小さな箱が入っていて、啓蒙時代の思想家や哲学者などの言葉のメッセージがあります。十字架には一つずつ名前が書いてあります。現代で広く知られている個人の自由や自由主義などの考えは啓蒙時代の思想家や哲学者の考えを受け継いでいる、とこのアーティストがよく言っていたのですが、それを反映する試みを行っています。新自由主義を唱えたマーガレット・サッチャーやロナルド・レーガンも現代の社会に影響を与えた人物とし、2つだけ名前を書いていない十字架とお墓があるのですが、それらがその2人のための十字架とお墓で、その1つの中にはサッチャーの有名な言葉で「社会というものは存在しない」というメッセージが入っています。

これからビデオを見ていただきます。ナイフで指の間を突き刺していく様子を見ていただきましたが、マリーナ・アブラモヴィッチが一人で行ったパフォーマンスを2人の男性がデュオでパフォーマンスしたものです。これはクロアチアとセルビアのアーティストの作品で、国と国との衝突を表してい

ます。『爪楊枝での対決』というタイトルです。1人はナイフを持って始めるのですが、もう1人は爪楊枝を持って始めるという作品です。パフォーマンスを繰り返すことが難しい作品で、ドゥブロヴニクではパフォーマーが自分の指を刺してしまいました。次は同じカンパニーの別の作品で、観客も参加して腕を縛っていくことを一緒にやりながら作品を作っています。このカンパニーは影響力のある作品を作っていて、7年間のプロジェクトを続けていて、1年ごとに5-6人のアーティストを招いて聖書の「七つの大罪」をテーマにした作品を作っています。フェスティバルのイベントの1つに「パフォーマンスの夜」というものがあり、6-8人のアーティストを招き、サイトスペシフィックな作品を作っています。夜10時から朝3時まで、30分ごとに作品を発表しました。これは人気のあるプログラムでいろいろな国や地域でも紹介したのですが、そのときにはバルカン半島出身の3人のアーティストと、現地の3人のアーティストがコラボレーションしながら作品を作りました。これは2人のクロアチア出身のミュージシャンの作品です。昨年、日本でレジデンスをして川村美紀子さんとコラボレーションをしました。実験的な音楽で映像も使い、即興的な音楽を作っています。次はニューヨークからの作品です。これは米国の作家ですが、アイデンティティなどをテーマにした作品を作っています。これはフランスのカンパニーで、他の作品のチケットを10枚買うことで、他の場所をハイジャックするというをやっています。彼らを招聘しても、実際に何をやるかは分からず、オペラハウスの中で作品を作るかもしれません。例えば、客席の最後部から転がり、次に服を脱いで転がるというパフォーマンスをしています。

以上をもちまして、私の話は終わります。本日はありがとうございました。

(以下、質疑応答省略)